

「ミュシャ展 マルチ・アーティストの先駆者」関連小企画

「熊本市現代美術館コレクションにみるマルチ・アーティスト」 開催報告



小企画：熊本市現代美術館コレクションにみるマルチ・アーティスト

会期 2024年2月10日(土) - 4月7日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリーII(一部)

「ミュシャ展 マルチ・アーティストの先駆者」関連企画として、「小企画：熊本市現代美術館コレクションにみるマルチ・アーティスト」を開催した。

マルチ・アーティストとは、ジャンルを超えて活躍するアーティストという意味で、現代日本においては、主にミュージシャンに使われることが多い用語である。

アルフォンス・ミュシャ（1860-1939）が生きた時代は、画家は画家、彫刻家は彫刻家で、ジャンルを超えて活躍することは、ほとんど無いのが通常だった。しかしミュシャは、画家の修業をした後、挿絵画家としてキャリアをスタートし、俳優サラ・ベルナルのポスターデザインで一躍注目を集め、今で言うアーティストック・ディレクターとして活躍し、パリ万博のパビリオンの壁画装飾、宝飾店の室内装飾、各種プロダクト・デザインやパッケージ・デザインを手掛け、チェコスロヴァキア建国時には切手や紙幣のデザインを無償で行い、晩年は画業に専念したという点において、マルチ・アーティストと言える。また、当時の最先端の話題の芸術家と、画家ゴーギャンや彫刻家ロダンなどとも交流し情報と刺激を与え合っていたことから、ミュシャのマルチ・アーティストらしい視野の広さが感じられるだろう。

この小企画展で紹介する日本のマルチ・アーティスト達、天野喜孝、草間彌生、蜷川実花、横尾忠則もまた、画家や写真家として活躍しながら、映画監督や舞台芸術、プロダクト・デザインやコラボでの仕事を通じて常に世間の注目を集めている。それぞれが一目でわかる特徴的なスタイルと色彩を持ち、時にセンシュアルなイメージを効果的に用いるなど、ひとの心をつかむビジュアル力を持っているのが特徴である。

出品作品解説パネルでは、各アーティストとミュシャの表現の共通点を探り、それぞれの作品の魅力を通じて、ミュシャの作品の特徴を改めて確認できるようにした。以下に載録する。

出品作家：天野喜孝、草間彌生、蜷川実花、横尾忠則（50音順）

出品作品点数：9点

会場にて出品作品リストを無料配布

■ 出品作品解説パネル

1

蜷川実花 mika

Mika Ninagawa mika

2004

C プリント、フォトアクリル 103.0 × 137.3cm ed.2/3

熊本市現代美術館蔵

2

蜷川実花 さくらん

Mika Ninagawa SAKURAN

2006

C プリント、フォトアクリル 137.3 × 103.0cm A.P.1/2

熊本市現代美術館蔵

3

蜷川実花 mika

Mika Ninagawa mika

2004 (プリント2018)

C プリント、フォトアクリル 68.5 × 51.5cm ed.1/6

熊本市現代美術館蔵

作品解説

写真家、映画監督、クリエイティブ・ディレクターの蜷川実花（1972-）は、現代日本で最も人気のあるアーティストのひとりです。

《mika》（2004）は、蜷川が初めて日本刀をファッションブルな小物として用いた作品で、以後「刺激的でポップで新解釈な和のイメージ」は彼女の作風のひとつとなりました。

《さくらん》は、蜷川の初監督映画「さくらん」のメインビジュアルです（主役：土屋アンナ）。この映画の公開当時、全国の成人式で花魁コスプレをする女性が激増するという社会現象を起こし、いまだその影響下にあります。

ミュシャによるサラ・ベルナールの演劇ポスター作品群と同様、蜷川によるセレブの写真作品もまた、人物の魅力を存分に引き出すための背景・美術・衣装・演出において独自の世界観が満載で示されます。

4

横尾忠則 毛皮のマリー

Tadanori Yokoo Marie in Furs (Tenjo Sajiki)

1968 シルクスクリーン、紙 104.0 × 74.0cm

熊本市現代美術館蔵

作品解説

現代美術家の横尾忠則(1936-)は、そのキャリアのスタートはグラフィックデザイナーでした。グラフィックデザインが日本ではまだ低く受け止められていた当時、横尾の手がけたポスターは刺激的な新風を吹き込みました。

この作品は、演劇集団である天井桟敷の公演「毛皮のマリー」のためのポスターで、フランスの画家ピエール・ボナールのポスター《『ラルヴュ・ブランシュ』誌》(1894)を参照しています。ボナールは、ジャポニズムの影響を強く受け、平面的な空間構成や、平面的で装飾的な衣装の表現などを好みました。ミュシャもまた、ポスター芸術の可能性を広げたボナールの影響を受けています。

他方で1960年代とは、英米のロックバンドのレコードジャケットやポスターにミュシャの作品が参照されるなど、ミュシャがユース・カルチャーを経由して国際的な再評価を取り戻し始める時期でもありました。

5

天野喜孝 花天

Yoshitaka Amano Ka Ten

1994

金箔、金粉、アクリル、紙ほか 75.0 × 106.0cm

熊本市現代美術館蔵

6

天野喜孝 月と太陽

Yoshitaka Amano The Moon and The Sun

2012-2013 頃

アクリル絵の具、アクリルパネル イメージ寸各 25.0 × 17.3 cm

熊本市現代美術館蔵

作品解説

画家、キャラクターデザイナー、イラストレーターの天野喜孝(1952-)は、アニメ「タイムボ

カン」やRPG「ファイナルファンタジー」をはじめ多種多様なキャラクターを生み出し、1980—90年代の日本のユース・カルチャーに大きな影響を与えました。当時の天野のイラストレーションや挿絵には、人物の背景にサークル型の装飾を描くなどミュシャの影響が数多く見られます。

《花天》は、90年代の天野の作風を代表する作品です。背景を全面的に埋める花の描写による平面的装飾性、金を多用した豪華で繊細な色彩、無重力で全方向性の空間、人物のセンシュアルな表情などが特徴的です。

ミュシャのポスター作品群もまた、金色や銀色の多用によって装飾性を高めた背景と、豪華に着飾った人物描写とのコンビネーションが特徴です。

7

草間彌生 ドッツ・オブセッション、水玉で幸福いっぱい

Yayoi Kusama Dots Obsession, Full Happiness with Dots

2009

携帯電話 10.9 × 5.1 × 3.0cm、オブジェ 14.5 × 14.2 × 15.0cm、ストラップ 13.7 × 2.3 × 0.7cm ed.40/100

熊本市現代美術館蔵

8

草間彌生 私の犬のリンリン

Yayoi Kusama My Doggie Ring-Ring

2009

携帯電話 10.8 × 5.0 × 2.0cm、オブジェ 20.0 × 9.5 × 27.0cm ed.44/100

熊本市現代美術館蔵

9

草間彌生 宇宙へ行くときのハンドバッグ

Yayoi Kusama Hand Bag for Space Travel

2009

携帯電話 11.2 × 6.0 × 2.3cm、ひも(てすり部分) 10.5 × 0.9 × 0.3cm、小田巻付き間接ひも 各 3.9 × 1.3 × 1.3cm ed.774/1000

熊本市現代美術館蔵

作品解説

現代美術家の草間彌生（1929-）は、1960年代のアメリカで、巨大な絵画作品から、ソフト
スカルプチャー、インスタレーション、パフォーマンス、映画、ファッションまで、多様な表
現活動を精力的に行い、先進的で刺激的なアーティストとして活躍しました。草間の国際的な
再評価は2000年代より始まり、いまでも評価は高まり続けています。

本シリーズは、KDDIの「iida」とコラボした「Art Editions Yayoi Kusama」の3作品で、携
帯電話として使うことができるアート作品として制作されました。ハンドバッグ、ミラーボックス、
犬型オブジェのそれぞれの表面は水玉で埋め尽くされており、草間好みの赤やピンクの色彩が
用いられ、小品ながらも強い存在感を放っています。

ミュシャもまた、パッケージ・デザインやプロダクト・デザインを数多く手がけましたが、ミュシャ
の美学や世界観がはっきりと示されているところに当時の市民も価値を感じたようです。

編集：富澤治子（熊本市現代美術館主幹兼主査・学芸員）

